

**北陸先端科学技術大学院大学**  
**令和5年度自己点検・評価に係る学外者による**  
**検証結果報告書**

令和6年12月  
北陸先端科学技術大学院大学

## 目 次

1	はじめに.....	1
2	令和5年度自己点検・評価の検証委員 .....	2
3	令和5年度自己点検・評価に係る学外者による検証結果.....	3

### (参考)

・	学外者検証の実施目的、検証方法等について.....	11
---	---------------------------	----

## 1. はじめに

学 長  
寺 野 稔

第4期中期目標期間では、国立大学法人の自律的な経営の実現と法人が社会と直接向き合う機会の充実を図るため、従前の文部科学省による年度単位の統制が廃止され、学外者による検証を含む中期計画の進捗管理（自己点検・評価）が各法人の自律的な判断と責任に委ねられることとなりました。この学外者検証は、こうした中期目標・中期計画の変容を踏まえ、これまでの文部科学省国立大学評価委員会が行っていた年度評価に代わり、直接ステークホルダーが法人の取組に関し忌憚のない意見を述べる場として新たに設けられた外部評価の仕組みです。令和6年9月20日の自己点検・評価報告会においては、令和5年度において国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学（以下「本学」という。）が行った各中期計画記載事項の取組状況に関するセルフレビューについての検証委員による調査・検証を経て、検証委員と法人執行部との意見交換を行いました。

第4期中期目標期間の2年目に当たる令和5年度においては、本学が掲げる世界トップの研究大学を目指した飛躍に向けて、研究面で新たなエクセレントコア拠点「超越バイオメディカルDX研究拠点」の創設、Matching HUB事業の全国展開および北陸RD X事業等との連携などの進捗があったほか、令和6年能登半島地震の復興支援についても、震災復興支援タスクフォースを立ち上げた点について高い評価を頂きました。

他方、中期計画に掲げる「博士後期課程学生に対する研究支援制度の改革」に対しては、日本学術振興会（JSPS）特別研究員申請に向けての支援や、科学技術振興機構（JST）次世代研究者挑戦的プログラムなどの外部の支援事業を活用した支援の継続に一定の評価を頂きつつも、本学独自の研究費支援制度を早期に確立することが期待されるとのご意見を頂きました。

国立大学法人は、その使命である人材育成や研究を通じて、イノベーションによる地域活性化や新たな価値の創出による産業界への貢献といった、社会からの期待に応えていくことが必要です。本学においても、自己点検・評価や学外者による検証を通じて自律的な経営体として発展を遂げながら、持てる可能性を最大限に活用し自らの機能を拡張することにより、我が国が挑む新たな社会に向けた挑戦を今後とも積極的に先導していきたいと思っております。

## 2. 令和5年度自己点検・評価の検証委員

氏名	現職等
井熊 均	一般財団法人北陸産業活性化センター エグゼクティブフェロー RDX推進室長
岩澤 康裕	電気通信大学 燃料電池・水素イノベーション研究センター長 特任教授
小俣 一夫	一般社団法人神奈川県経営者協会 名誉会長
金井 豊	北陸経済連合会 会長
小原 奈津子	昭和女子大学院生活機構研究科 特任教授
中尾 正文	旭化成株式会社 顧問
永田 晃也	九州大学大学院経済学研究院 教授

(敬称略・五十音順。所属・職名は委嘱時のもの。)

### 3. 令和5年度自己点検・評価に係る学外者による検証結果

#### I 教育研究の質の向上に関する事項

##### 1 社会との共創

(1) 世界トップクラスに比肩する研究大学を目指して、戦略的に国際的なプレゼンスを高める分野を定め、国内外の優秀な研究者や学生を獲得できる教育研究環境（特別な研究費、給与等）を整備する。併せて、データ基盤を含む最先端の教育研究設備や、産学官を越えた国際的なネットワーク・ハブ機能等の知的資産が集積する世界最高水準の拠点を構築する。

【1】 学問分野の枠を超えた学際的な研究分野・研究領域の開拓を支援するため、IR（インスティテューショナル・リサーチ）による研究力分析・動向分析の結果を活用し、新たな共創的研究のグループ化を推進する。

【2】 国内外の大学や研究機関との学術面における連携体制と、研究成果の社会実装を目指した産業界との緊密な連携体制を構築するため、本学における研究上の強みを中核としたネットワークにより「共創的イノベーション創出拠点」を形成し、優秀な研究者等の確保に繋げるとともに、活動を支援する。

中期目標	中期計画 年度計画	自己点検評 価結果	所見（コメント）	評定
(1)	【1】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ IRによる抽出プロセスは良い。今後は内容の差別化に期待。</li> <li>・ 共創的研究グループ創設はJAISTの将来にも繋がり重要である。共創的研究グループの活動本来を持続的に実現し、研究教育が固定化し若手研究者の活躍・育成を阻害しないよう本部の指導を願う。共創的研究グループは、学生配属の〇〇コースとは独立した〇〇コースとの位置づけになるのか。</li> <li>・ R5年度は共同研究契約締結5件、技術サービス契約1件など、ほぼ計画通り進捗させている。</li> <li>・ 評価指標に対しては計画通り実施している。指標が適切か否かは検討が必要。</li> <li>・ 3つのセンターの活動についてIRなどの指標で評価しながら、共創的研究グループ化へ向けて着実な施策、実行を行っていることを評価したい。今後に期待したい。</li> <li>・ 新たな共創的研究グループの検討に当たっては、強みを活かした適切な候補グループが挙げられていると思う。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している
	【2】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 想定外で予算確保は良い。ただし、目標の達成は今期は未では。リカバーの取組は良い。</li> <li>・ 共創的イノベーション創出拠点形成は我が国にとっても重要と評価できる。成果の技術移転や連携先での社会実装に加え、起業化も視野に入れているのか。そのための課題は解決されているか。</li> <li>・ 新たながん治療「免疫療法」等核となる題材に的を絞り連携拡大を！</li> <li>・ 超越バイオ拠点での研究は十分な成果が出ている。</li> <li>・ 研究成果の社会実装を目的として、産業界、他の大学との連携など活動を着実に実行している。地域に根差した活動、貢献の視点も評価したい。</li> <li>・ コアとなる研究者の集積や外部機関との連携が着実に進展したと思う。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している

## 2 教育

- (2) 研究者養成の第一段階として必要な研究能力を備えた人材を養成する。高度の専門的な職業を担う人材を育成する課程においては、産業界等の社会で必要とされる実践的な能力を備えた人材を養成する。(博士前期課程)
- 【3】すべての学生を対象に、社会的課題解決や新産業創出の共通基盤となる知識と方法論を学ぶ機会を提供するため、情報科学と知識科学の基礎と方法論(データサイエンス、AI、知識マネジメント等)を体系的に修得しうるカリキュラムを整備する。
- 【4】産業界等で求められる共創力を涵養するため、企業関係者等の参画による講義や研究指導など、産業界の知を活用した教育を全学的に展開する。
- (3) 深い専門性の涵養や、異なる分野の研究者との協働等を通じて、研究者としての幅広い素養を身に付けさせるとともに、独立した研究者として自らの意思で研究を遂行できる能力を育成することで、アカデミアのみならず産業界等、社会の多様な方面で求められ、活躍できる人材を養成する。(博士後期課程)
- 【5】博士後期課程学生の研究力強化と産業界等において通用する応用・開発能力の育成を図るため、「共創的イノベーション創出拠点」の活用も含め、産業界や海外機関と連携した研究指導を推進する。
- (4) データ駆動型社会への移行など産業界や地域社会等の変化に応じて、社会人向けの新たな教育プログラムを機動的に構築し、数理・データサイエンス・AIなど新たなリテラシーを身に付けた人材や、既存知識をリバイズした付加価値のある人材を養成することで、社会人のキャリアアップを支援する。
- 【6】高度で先端的・実践的な大学院レベルの学びの場を社会人に提供するため、社会人のニーズやライフスタイルを踏まえた教育プログラムを展開する。
- (5) 様々なバックグラウンドを有する人材との交流により学生の視野や思考を広げるため、性別や国籍、年齢や障害の有無等の観点から学生の多様性を高めるとともに、学生が安心して学べる環境を提供する。
- 【7】学生が研究・学修に専念できるように、希望する博士後期課程学生が必要な支援を受けられるための修学支援の改革と制度運用の改善を行うとともに、研究支援制度の改革を行う。

中期目標	中期計画 年度計画	自己点検評 価結果	所見(コメント)	評定
(2)	【3】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>こうしたカリキュラムがあることが良い。民間・他機関の連携で付加価値を高めて欲しい。</li> <li>データサイエンス、AI、知識マネジメント等を体系的に修得しうるカリキュラムは魅力的で社会から望まれる人材育成にとり重要なものである。カリキュラムに関係した教科書(e-book)を発刊し我が国を先導する試みも検討したらどうか。</li> <li>研究開発にあたり、最先端の技術を合理的に整理しカリキュラム化している。</li> <li>時代の要請に合致したカリキュラムの作成は適切で計画通り実施できている。</li> <li>データサイエンス、AI、知識マネージメントなど環境変化に柔軟に対応し、シラバスの改編などを行い学生の実能力の強化を図っている。また、リソース配分にも配慮がなされている。</li> <li>「創出カイノベーション論」という科目は、報告資料から見ると、本学の特色を活かした入門的な科目として受講者にも好評であるようだが、「創出カイノベーション」という語は些か理解し難いと思われる。(「イノベーション創出力」ならば分かる。)</li> </ul>	3: 年度計画を十分に実施している
	【4】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>継続的取組を期待する。</li> <li>インダストリアルアドバイザー向け中間発表会の再開(企業人の視点習得)。</li> <li>ゲストスピーカーの招請など今後も産業界との連携を行い、共創活動の強化を期待したい。</li> </ul>	3: 年度計画を十分に実施している

(3)	【5】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外留学や学外研究は重要と評価できるが、それぞれに派遣期間の取り決めがあるのかどうか、留学や学外研究の成果など評価の指針の記載が見られない。</li> <li>・システマティックな活動につながっているか明確にしてください！</li> <li>・学外・海外での研究活動は良い刺激になると思う。体験学生について、その教育効果を検証することが望まれる。</li> <li>・研究力とともに産業界で活躍する人材育成の観点から、研究留学助成などグローバル視点を育む施策は重要である。今後の活動に期待。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している
(4)	【6】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同類のコース・プログラムは他機関も実施。JAISTとしての差別性は何かをより明確にすべき。</li> <li>・「産学連携社会人コース」は魅力的であるが、質保証が必要と思われる。</li> <li>・日本ビジネスの中心地である品川の立地を生かし、存在感を示してほしい。</li> <li>・社会人ニーズに対応して、柔軟にプログラムを設定している。1年で博士取得可能なプログラムは大変ユニークであり、今後の成果、実績を注視したい。</li> <li>・「社会人のニーズを踏まえた教育プログラム」に含まれている科目の中には、どのようにニーズを把握し、実際にどの程度のニーズが存在しているのかが疑問に思われるものがある。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している
(5)	【7】 (【7-1】) (【7-2】)	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>・博士後期課程のメニューが充実されている。</li> <li>・SPRINGやBOOSTの採択は評価される。「JAISTならではの研究費支援制度の創設」は外部プログラムを含めた総括的な制度なのか。博士課程院生への研究費支援の目的と波及効果、および生じる問題点を整理・検討をすることで、次の段階のJAISTならではの制度創設が生まれることを望む。</li> <li>・支援結果のフォローをしっかりと、今後の合理的運用につなげる。</li> <li>・支援財団とはもう少し意思疎通を図る必要がある。</li> <li>・UAはよいシステムであり、1年間のD学位取得プログラムも画期的であるので、学生募集の際にも宣伝に活かせるとよいと思う。</li> <li>・UAなどの施策は大変工夫された学生支援制度であり、本学のアピールにつながる。継続、強化を期待したい。</li> <li>・JSTの支援事業とは異なる独自の定常的な博士後期課程学生に対する研究支援制度を早期に確立することが期待される。研究支援制度の適用に係る審査プロセスでは、科研費の研究計画書を模した申請書の作成を課し、プレFDとしての研修効果を持たせてはどうかと思う。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している

### 3 研究

(6) 地域から地球規模に至る社会課題を解決し、より良い社会の実現に寄与するため、研究により得られた科学的理論や基礎的知見の現実社会での実践に向けた研究開発を進め、社会変革につながるイノベーションの創出を目指す。

【10】研究成果を速やかに社会実装する体制を整備するため、研究と産学官連携を一体的かつ有機的に支援する仕組みを整え、URA（ユニバーシティ・リサーチ・アドミニストレーター）等の機能・役割の拡張・高度化や、新たな研究支援制度の確立などを通じて、研究活動の活性化から社会への技術移転までをシームレスにサポートする。

【11】地域経済の活性化や地方創生により一層貢献するため、大学の技術シーズと地域・産業界のニーズの融合を促進するプラットフォーム事業をより一層強化し、全国規模に拡大する。

中期目標	中期計画 年度計画	自己点検評価 結果	所見（コメント）	評定
(6)	【8】（【1】） 【9】（【2】）	年度計画を十分に実施している		3：年度計画を十分に実施している
	【10】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>・記載事項はいずれも高い重要性・必要性をもち成果もあげており課題を不断に検討し継続的な成果を期待したい。</li> <li>・重要かつ成果も出ているテーマであり、今後の具体的な進め方について述べて頂きたかった。</li> <li>・URAは成果の社会実装、研究費の獲得など非常に重要な施策である。URA人財の獲得、育成など今後も強化維持に務めていただきたい。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している
	【11】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Matching HUBを核とした展開は独自であり、求心力も高まっている。RDX、TeSHとの連携も進んでおり高評価。北陸のリーダーシップを掲げて欲しい。</li> <li>・JAISTが先導する独創的な各種活動が実施されており今後も活動に期待する。</li> <li>・スタートアップ企業の件数、総売上、技術による社会貢献などの実績を分析評価し管理すべき時期では。</li> <li>・北陸RDXとの連携が十分に図られている。</li> <li>・Matching HUBは地域の活性化、社会実装などの観点から、非常に良い取組である。実績も数値面で上がりつつあり、また他の地域への拡大展開も図っており、今後どのような成果に結び付くかを期待。</li> <li>・Matching HUBは産学官連携プラットフォームとして極めて顕著な実績を挙げており、その全国展開を推進することが期待される。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している



## II 業務運営の改善及び効率化に関する事項

- (7) 内部統制機能を実質化させるための措置や外部の知見を法人経営に生かすための仕組みの構築、学内外の専門的知見を有する者の法人経営への参画の推進等により、学長のリーダーシップのもとで、強靱なガバナンス体制を構築する。
- 【12】 様々な経営上の課題に柔軟かつ適切に対応しうる透明性の高いガバナンスを実現するため、学長のリーダーシップを支える戦略部門における情報収集・分析機能の強化に加え、各種アドバイザー制度等の充実による学内外の知見の一層の活用を進める。
- (8) 大学の機能を最大限発揮するための基盤となる施設及び設備について、保有資産を最大限活用するとともに、全学的なマネジメントによる戦略的な整備・共用を進め、地域・社会・世界に一層貢献していくための機能強化を図る。
- 【13】 本学の強み、特色となる分野に対して、戦略的・重点的再配分を行うため、大学が保有する資産について定期的な調査を通じて利用状況を把握し、全学共用スペースを確保し、目的に応じて有効に活用する。
- 【14】 保有する施設の長寿命化を推進するため、インフラ長寿命化計画に基づき該当する施設・設備の保全や維持管理を進める。
- 【15】 産学官連携による社会的課題の解決や新産業の創出に貢献するため、大学、企業、公的研究機関等による研究設備等の共用化を推進する。

中期目標	中期計画 年度計画	自己点検評 価結果	所見（コメント）	評価
(7)	【12】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>意思決定に資するIRデータを提供した、或いは、博士修了要件について企画検討する際にIRを活用した、と記載されているが、IR活用などの具体性が書かれていないので、どの程度IRデータが貢献しているのか判断難しい。IRデータの国際視点でのAI分析は可能か。世界トップの大学を目指すスタンスなので評価委員会に海外有識者を入れること（アカデミックアドバイザーを改訂？）がよいかそうでないかを検討したか。</li> <li>ガバナンスの強化と充実化をしっかりと行っていると評価しているが、経営協議会は時間の制約上、執行側の説明と報告が中心となっている。そのため経営協議会とは別途大学の運営、先端大のみならず日本の研究力の底上げについてどうあるべきかなどを議論する場を設けることも必要ではと感じる。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している
(8)	【13】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>全学共用スペースが有効に配分されていることは研究プロジェクトの外部評価の高さとも相関し年度計画が十分に実施できていると評価できる。全学的な公平性から使用スペースの利用料（電気代）を適切に徴収しているのか。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している
	【14】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>具体的に対応が実施されている。更新計画との関連付けは検討されているか。</li> <li>インフラ施設・設備の長寿命化は研究大学院としては基盤的長期にわたる継続的課題であり、技術的な進歩を抜本的に取り入れ、鋭意適切に進めて頂きたい。</li> <li>激甚災害が多発する中において、安全・安心な教育研究環境を担保するための基盤的な取組となる施設の長寿命化に、本学は堅実に取り組んでいると思う。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している
	【15】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>装置類の利用目標値を遥かに超え、外部（大学、企業、公的研究機関）利用も20%以上あり、マテリアル先端リサーチインフラの運用はうまくいっていると評価できる。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している

### Ⅲ 財務内容の改善に関する事項

(9) 公的資金のほか、寄附金や産業界からの資金等の受入れを進めるとともに、適切なリスク管理のもとでの効率的な資産運用や、保有資産の積極的な活用、研究成果の活用促進のための出資等を通じて、財源の多元化を進め、安定的な財務基盤の確立を目指す。併せて、目指す機能強化の方向性を見据え、その機能を最大限発揮するため、学内の資源配分の最適化を進める。

【16】多様な財源の確保を図り、より自律的・安定的な財務基盤を構築するため、URA等の機能・役割の拡張・高度化や、新たな研究支援制度の確立などを通じて寄附金や共同研究等の外部研究資金等の獲得額を増加させる。

【17】中長期的な視点から世界的な研究大学としての地位確立を目指すため、研究活動全体の底上げに向けた配分ルールの見直しを行うほか、拠点形成や博士学生支援など研究力強化に不可欠な施策・事業への重点的な予算配分を行う。

中期目標	中期計画 年度計画	自己点検評 価結果	所見（コメント）	評定
(9)	【16】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>・民間・市場からの資金獲得（技術への対価）を推進して欲しい。現状までの成果は大変良好。</li> <li>・URA等の機能・役割の拡張・高度化方策を検討するとともに、外部資金獲得支援方策を検討、実施するとして実施計画は成果をあげ評価できる。組織的な情報獲得とJAISTのシーズの底上げを図ることで、評価指標の達成が十分に期待できる。</li> <li>・産学連携等研究収入等が計画を超えて獲得できている。能登半島地震への対応が適切にできている。</li> <li>・URAの関与の効果および受託研究収入の増加は評価できると思う。</li> <li>・獲得資金面において成果が上がっていることは評価できる。一方で、大学の規模あたりの獲得資金の大きさは他大学と比較してどうなのか、物価上昇を踏まえたトータルでの実質研究費はどうかなどの評価議論が必要ではないか。</li> <li>・外部資金獲得機能を増強する上で、URAの役割を拡張することは重要な方法になり得ると思うが、その際、URAの職域が曖昧にならないよう配慮するとともに、適切な任用・処遇制度を設けることが課題になる。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している
	【17】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和5年度において評価指標の達成水準を満たすことは評価できる。重点的な予算配分内容も理解できる。中長期的な視点から世界的な研究大学としての地位確立を目指す目標の一環であることに留意し予算配分の取組を実施してほしい。</li> <li>・課題で指摘のように予算配分の取り組みの効果を検証していただき、今後の施策に反映させることが望ましいと思う。</li> <li>・限られた財源の中で、予算配分を工夫し効果的にQ1ジャーナル、OA掲載数などを増加させている。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している

#### IV 教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置

(10) 外部の意見を取り入れつつ、客観的なデータに基づいて、自己点検・評価の結果を可視化するとともに、それを用いたエビデンスベースの法人経営を実現する。併せて、経営方針や計画、その進捗状況、自己点検・評価の結果等に留まらず、教育研究の成果と社会発展への貢献等を含めて、ステークホルダーに積極的に情報発信を行うとともに、双方向の対話を通じて法人経営に対する理解・支持を獲得する。

【18】 社会への評価情報の発信を通じたステークホルダーとの関係構築や、評価情報の分析を通じた検証結果のフィードバックによるエビデンスベースの法人経営の実現に資するため、内部質保証としての自己点検・評価（モニタリングとレビュー）等の計画的な実施を通じて、教育研究面での強みや特色、国際的な通用性を明確化し、社会に対し公表するとともに、評価の結果顕在化した法人経営上の諸課題を執行部に報告する。

【19】 ステークホルダーからの理解と支援の獲得に向けた情報発信を進めるため、評価情報の分析結果や教育研究活動の見える化を通じて、ステークホルダーが求める情報を適時・適切に伝達しうる仕組みを整備する。

中期目標	中期計画 年度計画	自己点検評 価結果	所見（コメント）	評定
(10)	【18】 【19】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己点検・評価等の法人経営へのフィードバック及びステークホルダーが求める情報の提供に至るという評価指標は達成されている。自己点検・評価の活用が現場で適切に行われているか実態調査も望まれる。</li> <li>自己点検など、どのようにステップを踏んで進めていくかよく検討されている。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している

#### V その他業務運営に関する重要事項

(11) AI・RPA（Robotic Process Automation）をはじめとしたデジタル技術の活用や、マイナンバーカードの活用等により、業務全般の継続性の確保と併せて、機能を高度化するとともに、事務システムの効率化や情報セキュリティ確保の観点を含め、必要な業務運営体制を整備し、デジタル・キャンパスを推進する。

【20】 Society5.0実現に向けたスマートシティリファレンスアーキテクチャ等の標準技術に基づくキャンパスDX基盤を実現するための「キャンパスDX推進計画」を策定する。

【21】 「キャンパスDX推進計画」に基づき、大学運営や教育研究活動を統合的に支援するシステムの実現に向けたキャンパス連携基盤の構想・設計等の基本方針の確立及び一部実装を推進する。

中期目標	中期計画 年度計画	自己点検評 価結果	所見（コメント）	評定
(11)	【20】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>DX推進計画ができたことは良い。DXは実績が問われるので実現に注力して欲しい。</li> <li>「キャンパスDX推進計画」が実行され、令和6年度の計画改定に向けて進んでいると評価できる。</li> <li>外部メールが受信不可のトラブルあり、外部との連携強化の中システム対応強化が必須！</li> <li>計画段階であり、今後のどのように具体化され、実行していくのかを注視したい。</li> <li>DX推進計画が、本学のビジョンの実現とどのように関連しているのかが、いまひとつ理解できなかった。何のためのDXであるのかを明確にすることが肝要かと思う。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している
	【21】	年度計画を十分に実施している	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育、研究分野では成果も出している。</li> <li>各種業務、手続のDX自動化の検討と進め方は評価するが、DX自動化に対する教職員の対応が鈍いように思われる。連携APIへの取組の加速が望まれる。</li> <li>計画段階であり、今後のどのように具体化され、実行していくのかを注視したい。</li> <li>DX推進計画の具体化を推進する中期計画21の内容についても、本学固有のビジョンや理念を反映した特色を明確にする必要があると思う。</li> </ul>	3：年度計画を十分に実施している

## 全体を通しての所見（コメント）

- ・多様な分野への取組が高いレベルで実施されている。成果創出に向けて頑張っている。
- ・令和5年度年度計画の実施状況は、教育・研究・業務運営・財務などI-Vの全ての項目において、JAISTが自ら定める将来像の実現に向けて、年度計画を十分に実施していると高く評価できる。最近、特に若手・中堅教員の研究時間減少が益々問題になっているが、文科省の各大学が大学院の重点的改善取組への支援が表明されていることと関係し、JAISTの若手・中堅教員の研究時間が比較的多い環境を維持している方策はJAISTのアピールポイントの一つになると思われる。また、データサイエンス、AI、知識マネジメントなどを体系的に修得しうる必修講義プログラムは魅力的でタイムリーでインパクトを与える内容なので、教科書・参考書（e-Book）を発刊したらどうか。大学・大学院教育のみならず産業界若手人材育成、リカレント、リスキリングにも使える内容なので、この種の教科書・参考書はない日本でJAISTの影響を發揮にもなるので検討したらどうかと思われる。さらに、科研費の採択率をあげるために最近登場したJSPSへ申請前に申請書のAI審査を受けること（予測採択率も出る）を試行してみてもどうか。
- ・自己点検の評価が全て「3」であるのは？謙虚さも大事であるが自信をもって良いものは良いと評価する環境を醸成してほしい！
- ・博士課程の学生に対する支援は非常に充実している。超越バイオメディカルDX研究拠点における研究は非常に期待が持てる。
- ・卒業生の就職先へのアンケートについては言及されていないが、このような（企業？）アンケートを行い、今後の教育の参考に生かすことも必要かと思う。
- ・財務基盤充実化など様々な課題に対して施策を行い進展させていることを高く評価したい。また、特徴ある研究領域で世界トップレベルを目指すという目標とともに、Matching Hubなど地域に根差した活動を行い、北陸先端大として地域貢献を含め独自のポジションを確立しつつあると評価する。本取組については他地域への拡大展開を図っており、この点も今後の活動に期待したい。加えて、研究力強化の視点から研究者の実研究時間の客観的分析についても行っていただきたい。
- ・全体としては、寺野学長の強力なリーダーシップの下で、学内組織の統合と、学外組織との連携・調整が高いレベルで達成され、「世界トップレベルの研究大学」という目標に向かって着実な進展が見られたと思う。

※評価基準は4段階評価であり、各委員が付した評点の加重平均として算出。（小数点以下四捨五入）

- 4：年度計画を上回って実施している
- 3：年度計画を十分に実施している
- 2：年度計画を十分には実施していない
- 1：年度計画を実施していない

## (参考)

### 学外者検証の実施目的、検証方法等について

#### 1. 実施目的

第4期中期目標・中期計画における令和5年度年度計画の実施状況に係る自己点検・評価の結果について、学外有識者による検証を行うことにより、本学の教育研究活動等の改善・充実を図ることを目的とする。

#### 2. 検証委員

学术界、産業界の視点から検証することに加え、大学経営の視点からも検証することが必要との考えから、本学の経営協議会学外委員を検証委員とする。

#### 3. 検証方法

##### (1) 検証委員による事前確認

- ①自己点検・評価報告書及び関連資料（以下「報告書等」という。）を検証委員に事前送付し、報告書等の内容を精査してもらう。
- ②検証委員は、報告書等に関する照会又は追加資料の請求を行うことができる。

##### (2) 検証委員との意見交換

令和6年9月開催の経営協議会前後の時間を活用して「自己点検・評価報告会」を開催し、検証委員と本学役員等との意見交換を実施する。各担当理事・副学長が自己点検・評価結果について説明を行った後、年度計画の実施状況や中期目標・中期計画の達成に向けて本学に期待すること等について意見交換を行う。

##### (3) 「評価シート」の作成

- ①検証委員は、意見交換の内容等をふまえ評価シートを作成し、学長に提出する。
- ②検証委員は、評価シートにおいて中期目標ごとに評定（4段階評価）を付すとともに、必要に応じて所見（コメント）を記す。評価シートの評定の基準は、次のとおり。

##### 【評定の基準（4段階評価）】

- 4：年度計画を上回って実施している
- 3：年度計画を十分に実施している
- 2：年度計画を十分には実施していない
- 1：年度計画を実施していない

(4) 学外者検証結果報告書の作成・公表

- ① 検証委員による評価結果や意見交換の内容等をふまえ、計画・評価委員会にて評価結果を取りまとめ、学外者検証結果報告書の原案を作成し、検証委員がこれを確認する。
- ② 検証委員による内容確認を経て、報告書を完成させ、学内で共有するとともに、本学ウェブサイトにて公表する。

(5) 検証後の対応

検証委員から指摘を受けた事項について、「内部質保証の推進体制に関する基本方針」に基づき、計画・評価委員会が改善までのモニタリングを行う。